十六になつたお京

水野仙子

慶應二年寅の正月を迎へてお京はたうとう十六になつた。幾らか下り氣味の眼にもつた愛嬌は、此頃益圓味を加へて來た白い頰の肉と共に、十六といふ華のやうな年に向つて微笑んでるやうだつた。その微笑に對して、その華のやうな年は何をもつてお京に答へようとするのだらう？　けれども彼女は自分に就ては何も知らない他の誰もの如く、否それにも增して何も知らなかつた。たゞ健かに美しく發育して行く自分の肉体と、それに伴つた嬉しいやうな悲しいやうな、遠いやうな近いやうな、つきつめられない仄かな或る情緒とより外には。

お京は奥州の某郡に、會津街道の通りを扼してゐるN領に、其處の問屋の二番娘として生れた。Nは水戸家より出た松平某守の本領地で、高は一萬五千石ばかり、それに常州の領地一萬五千石を合せて都合三萬石となるのであつた。けれども某守は江戸表住居で、Nにも常州の領地にも御陣屋だけが建てられ、常にお國詰めの代官が支配するところとなつてゐた。

お京の父親は其Nの郷士で、藤井治右衛門藤原義隆といつた。十二の年に孤子となつて伯父太左衛門夫妻の世話になつたが、よく其冷遇に堪えて艱難辛苦の揚句、終に二十歳で其家を再興した。負け嫌ひで世話好きで、物事に巧者な性質で、又敏活でもあつた。壯年の時に見込まれて問屋役を勤める事となり、其半官半民的な仕事をてきぱきと捌いて行つた。

嫡子の龜之助は當年廿二歳、母親似の内氣な物優しい性質で、体も生れ付き弱い方だつたけれど、又一方に父から享けた張りの強い氣で持ち堪へて行つた。まだ無妻で家業の見習ひをしながら、古文學の書籍をいつも側から離さないやうにして居た。龜之助はお京を非常に可愛がつた。一体にお京は此家で唯一の被寵愛物だつたけれど――龜之助とお京の間にはも一人の娘があつたのだけれど、それは小娘のうちに病死した――龜之助は常に女のやうな注意深さをもつて妹を愛し護つた。お京は花の蕾がたゞ其時を得て開いて行く事さへ知つて居ればそれですむやうに、のんびりと素直に育つて行くより外には、自分に就て何の用意も知識も要らなかつた。

お京には去年あたりからぽつ〳〵と縁談があつた。時の代官篠田傳之丞の甥に當る笠間庄左衛門は、取つて廿四歳の男盛りで、お京に懸想の餘り伯母を説き、伯母から伯父を説かせて遂に相當の中人を立てゝ貰ふ事にした。それは去年の秋の事で、中人は型の如く一應藤井の家へ渡りをつけた。其時治右衛門は龜之助を呼んで此縁談にについての意嚮を訊ねた。暫くして龜之助はたゞ一言、

「どうも……」と言ひ澁つた。
「うん、よし、まだ早いな。」と治右衛門は言つた。
　話はそれなりになつて了つた。二人は別に其事に就て深く考へて見やうともしなかつた。まだ子供だとばかり思つてゐる譯でもないけれど、假令何處にでも、たゞ何となく遣り惜しまれたのであつた。嫡子が虚弱故、娘は當分家にとゞめて置きたい考へといふ治右衛門の挨拶があつてから、餘り氣乘りのしなかつた中人は再度と問屋の閾を跨なかつたので、間もなく二人の念頭から其事は消えて了つた。增してお京は何を知らう？
　正月の二日の晝近くに、一人の小者が入つて來て上り框の所に狀箱を置いた。墨の色も匂やかに初春らしい氣分をそゝる歌留多會の案内で、それは毎年家中の一部の人達が巡回に催す娯みであつた。
　お京は何をとも分らぬ嬉しい期待に胸をそわ〳〵させながら日暮を待つた。さうしてちよい〳〵八ケ間敷口を出すのに困りながらも、乳母に手傳はせて髪も自分から結ひ上げると、雜務を厭うて倉座敷に遁げてゐる病氣な母親の傍で、あれこれと着物を簞笥から出したり入れたりした。
　踏込みの爐の火はあか〳〵と燃えて、松脂のあげる焔に邊りは晝間のやうな明かるさ、正月早々の事とて宿りを賴む旅の者も無ければ、廣い家の中は常になくのんびりとたゞ火が燃えてゐる。
「どう〳〵！」と時々馬を制す聲が裏から聞えて、お湯を使はせてゐる音がぼしや〳〵と寒い中を通して温かさうに聞えて來る。
「そら今日は御馳走だぞよ、馬にだつて正月があるわい、なあ青！」
　若い頃馬に投げられて不具になりながら、猶馬達と離れる事の出來ぬ跛の爺が、今日の役目もこれで濟んだといふやうにどつこいしよと爐傍に陣取つてさて例の濁酒を初めようとした時、下男の作藏が弓張を持つて蠟燭の火をつけに來た。
「孃樣は今日は歌留多にござらつしやつたかの？」
「うむ、今夜は荒井樣がお宿だつつうで。」
　お京はもう上り框に立つて、後から乳母が思ひ切り惡く袂を引張つて揃へてゐるのを待つて居た。
「それではお父さん、兄さん、行つて參じやす。」と帳場の方へお京は手を支へた。
「あ、よく氣を付けてな、先樣へ上つたらよく御挨拶を申上げるのだぞ。」と治右衛門は肯いた。
　お京は揃へてある下駄に白い足袋の先を乘せようとして俯向いた拍子に、八重菊の花辯を持つた銀の簪が拔けかけてその脚を見せた。
「簪が落ちる……」と龜之助は其島田髷を眺めながら遠くから言つた。お京は襦袢の裏袖の紅く纏はる兩手を擧げ

て、前よりは幾らか前髪寄りにそれを差替へた。
「嬢様行つてお出なさりませ。作どん氣をつけて賴むぞい。」
乳母は、茶の搦み糸の縞格子のお召に、下着は折鶴散しの羽二重の小紋形、縹色のふきを二枚重ねて、大きく龍紋を織り出した小緞子の帶をうつりよく矢の口に〆めたお京が、弓張の灯影に送られて夢のやうに吾が家を出て行く後姿を何時になく寂しい氣持で見送つた。
雪のない正月は珍らしいけれど、風はさすがに頰を刺して、今にも霰か何かを誘ひたげな風情、乾いて凍つた冬の夜道に駒下駄の音が高らかに響いて行く。お京が今宵の歌留多の宿に着いた時には、早くも一と間から賑かな笑ひ聲などが洩れてゐた。作藏は此家の主婦にお京を渡して、そして一先づ家に歸つて行つた。
行燈の奥床しい灯と、二つの燭臺に涙を垂れる蝋燭の灯影とは、廣やかな間の緋毛氈の上に散らされた歌札の上に落ちて、讀み手の聲を攫つて行く應へと共に入り亂れる手先を照らしてゐた。勝負は幾度か繰り返されて、興に乘つた人々の顔はお互に親しく溶け合つて居る。お京はふと、今まで自分の隣に居た此家の主婦が、夜食の用意の爲めにするりと座を外したのに氣付いて、ほてつた頰に兩手を當てながら、
「もう何時だらう?」と思つた。さうして皆々に気付かれぬやうに、そうつと其座を脱けて中庭から裏の厠に立つた
外は數々の星明りにうつすらと大きな裏山の影を立てゝ居た。寒さは急に宵にも増して身にしみるやうに覺えたけれども、座敷の障子にうつる人影のみは暖かさうに笑ひさゞめいて居る。
お京はふと聞き耳を立てた。朗々とした謠の聲が、表の通りをだん〳〵こちらに近づいて來るやうであつた。それに冴えた雪駄の音もチラ〳〵と交つた。お京はなんでもなくそれを聞き流すと、崩れた衣紋を繕ひながら裏口を入つた。
此時表に謠の聲はハタと止んだ。
――やがて靜かに表戸の開く音がした
「春の夜の夢ばかりなる手枕に……」
折しも歌聲が聞え出したので、お京は氣もそゞろに小走りして上り口に近よつた。彼女は、表口から裏口へ通じた中庭の光りの届かぬ影に、自分を認めて恰も釘付けにされたやうに突つ立つた男の姿があるのに少しも氣が付かなかつた。
お京は内端に片足をかけた。
「お京さま!」
それは叫ぶともつかず呼ぶともつかぬやうな、不思議に胸に透る響をもつた聲であつた。何がなしハツとして振返るお京の目先に、
「御免!」と閃めいた刃、
「あツ!」と翳した手の先と、眩しさを感じた眉間とに何物かゞ輕く觸れた。
「御免!お後から參りますぞ!」
お京は其聲をはつきりと聞いた。再

び振り翳された刃の下の恐怖に輝く彼女の眼は、其刹那の間にも係らず、熱く燃えて潤める二つの眼――それはお京が曾て見た事もなければ味はつた事もない――に見入つた。其眼は彼女に、假令遁げ得る間があつたにしたところで、それを與へはしなかつたであらう程の魅力を持つて居た。

たゞ其眼だけであつた。其眼より外にお京は何をも見ず、何をも知り得なかつた。彼女はばつたりと其場に倒れた。恰も枝を離れた落椿のやうに！

上を下への騒動の後で、漸く人々が知り得た總ては、額に美しくかすり疵を負ひ――それは銀の花簪が脱け出して彼女を第一の刃から救つたのだつた――左の肩先深く切り込まれた深手に既に息絶えてゐるお京の傍に、今夜の歌留多會には「所用のため不參」といふ事になつてゐた笠間庄左衛門が俯向しになつて死んでゐた事であつた。彼は袴の上から下腹を刺して一文字に掻き切つてゐた。

仇なる情に伴はれて去つたお京の魂は、此世に於ける十六年の記念をその美しい骸に止めて、靜に靜に、彼女にと定められた道を旅立つて行つた。

【入力者注】

底本は総ルビですが、入力者の判断で一部のみ残しました。ご不明な点は、底本の画像でご確認ください。

底本・初出：大正六(1917)年六月十日
讀賣新聞　朝刊
入力：小林　徹
公開：令和五(2023)年七月九日
リンク：水野仙子作品年譜